5/11 まいど！倫理号です。仲々理解出来ない文章です「今、ここ」を大切にしているだろうか？皆さん今一度ゆっくり立ち止まって意識を向けてみたいものです。幸せ運ぶ八一鳥

今週の倫理 1133号 2019.5.11 ▷ 5.17

新しい時代の幕開けに際し、「今・ここ」にいる自分の足下を顧みて、より良い未来を築いていきましょう。

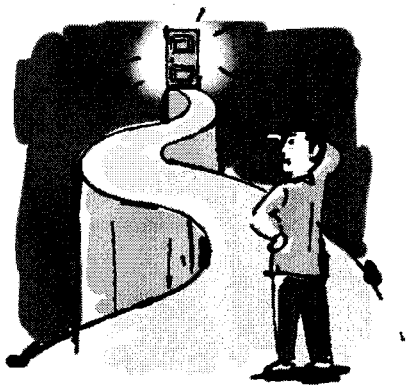
五月一日より、「令和」の時代が始まりました。すでに決められた元号を、前もって知らされた上で歩むことは、日本の歴史上初めてのこととなります。

平成の時代の終わりに敬意を表しつつ、新たな未来に向けてスタートを切った国内では、厳かな祝賀ムードに包まれています。改めて、元号の意味するところや、典拠となった『万葉集』を繙いてみましょう。

引用元となった文言は、「梅花の歌三十二首」の序文にある、「初春の令月にして、気淑（きよ）く風和（かぜやわら）ぎ、梅は鏡前（きょうぜん）の粉（こ）を披（ひら）き、蘭は珮後（はいご）の香（こう）を薫らす」です。

この歌は、今から約千三百年前の天平二年正月十三日、歌人で大宰府長官であった大伴旅人の邸宅に官人たちが招かれた宴で、梅に関する和歌三十二首が詠まれた際に、その序文として寄せられたものです。古の人々は梅の花を愛でながら杯を交わし、仲間と共に花の美しさやその年の願いを込めて、数々の歌を詠んだことでしょう。

元号の「令和」には、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められています。旅人の子息・大伴家持は、『万葉集』の代表的な歌人で、編者ともされています。『万葉集』には、天皇や皇族から農民まで、幅広い層の人々が詠んだ歌が収められています。



5月のテーマ｜今日の外に人生はない

新しい日本の幕開けと共に今を生きる

翻って、今を生きる我々には、日常の中に、このような風流で雅な余裕が、どれほどあるでしょうか。

スピードと効率や成果を求められがちな社会に、テーゼを投げかけた、故・福田恒存氏の言葉を紹介します。

「昔はあったのに今は無くなったものは落着きであり、昔は無かったが今はあるものは便利である。昔はあったのに今は無くなったものは幸福であり、昔は無かったが今はあるものは快楽である。幸福といふのは落着きのことであり、快楽とは便利のことであつて、快楽が増大すればするほど幸福は失はれ、便利が増大すればするほど落着きが失はれる。全く奇妙なことだが、人は暇をこしらへて落着きたいと切望し、そのために便利を求めながら、その便利のおかげでやつと暇が生じたときには、必ずその暇を奪ひ埋めるものが抱合せに発明されてゐるのだ。つまり、便利は暇を生むと同時に、その暇を食潰すものをも生むのである」

（『福田恒存全集』五巻／文藝春秋）

現代社会を生きる私たちは、便利さと効率ばかりに傾倒しがちです。「今・ここ」という、かけがえのない瞬間に真心を向けて生きているでしょうか。また、今の自分に与えられた境遇、日常の中に起きる現象に、意味や原因を探ろうと、意識を向けているでしょうか。

時間に流されるばかりでなく、時には立ち止まり、未来を見据えるゆとりも必要です。「今・ここ」に真心を込めて生きることで、真に豊かで充実した人生を切り開き、新たな時代を創造する力に変えたいものです。

一般社団法人 倫理研究所 法人局

え・城谷俊也